

## ミノア期におけるディオニューソス信仰

〔カール・ケレーニイのディオニューソス研究に関する一考察〕

本間 邦子

### 序

カール・ケレーニイは、ディオニューソスをクレータ島と深い関わりのある神としてとらえ、ミノア期のクレータ島とディオニューソス信仰を結びつける見解を示した。ミノア期のクレータ島におけるディオニューソス信仰を考えるにあたり、ギリシア語には〈生〉を意味するゾーエー (zōē) とピオス (bios) という二つの語があることを念頭にに入れておかなければならない。〈生〉を意味する言葉が二つあるということは何らかの使い分けがされていたと考えられる。この二つの〈生〉の特徴を彼の言葉を借りて簡潔に説明するならば、「ピオスは、タナトスすなわち〈死〉に対

してそれを排除してしまうほどの対極の位置にはない」(1)が、「ゾーエーはタナトスに対してはつきりとした対極の位置にある」(2)とすることができ、それでも、この二つの〈生〉は互いに相容れない性質のものではなかった。ケレーニイは、ゾーエーとピオスの関係を以下のように表現している。「ゾーエーはすべての個々のピオスをビーズのようにつないでいる糸のようなものである。そしてこの糸はピオスとは異なり、ただ永遠のものとして考えられるのである」(3)。この比喻から解釈するならば、ゾーエーはすべてのピオスの根底に流れているので、たとえある一つのピオスが〈死〉を受け入れたとしても、次のピオスまで不断なるゾーエーが続いていると考えることができるのである。このように〈生〉を意味していながら〈死〉に対して

全く異なった立場にある二つの言葉が存在することから、〈生〉がいかに重要なテーマであったかが窺える。これからディオニューソスについて論じてゆく際にも、〈死〉を完全に排除してしまう〈生〉ゾーエーが重要な関わりを持つてくるのである。

ミノア期のクレータ島の遺跡や美術品を見ると、渦巻文様の装飾が印象的である。なぜこれ程までにミノア芸術に渦巻文様が多用されたのだろうか、という疑問が浮かんでくる。渦巻文様は世界中の様々な古代文明の遺物から見つかっており、この文様が一か所で考案され世界中に広まったとは考えにくい。しかし、世界中の多くの渦巻文様それぞれに神話や宗教、特に冥界を示す迷宮と深く関わりを持つていると考えられていることは非常に興味深い。ギリシア神話にもクレータ島の迷宮の物語が伝えられている。この物語の登場人物であるクレータ島の王女アリアドネーとディオニューソスの関係、そしてクレータ島のディオニューソス信仰とミノア人が好んで描いた渦巻文様との関係を考察することがこの研究の目的である。

ケレーニイは、ミノアの祭祀や芸術のなかにクレータ島におけるディオニューソス信仰の手がかりを求め、ディオニューソスの持つ〈生〉の象徴を見いだした。ディオニュー

ソスと、ミノア芸術の担い手たちが描いたゾーエーのイメージがつながるとき、彼らにとって〈生〉がどのような意味を持つていたのかが明らかになるはずである。

## 1 デイオニューソス信仰について

### 1 クレータ島における祭祀の場所

ケレーニイはディオニューソスを研究するにあたって、まずクレータ島に注目し、ここを出発点としている。クノッソス出土の印章(図1)には、ミノア人に崇拜されていたと考えられる女神と、彼女を前にして目が眩んでいる男の姿が刻まれていた。この男は彼女を山頂に出現した神の姿としてとらえることができたのだろう。ミノア期のクレータ島では、この印章に描かれたようなヴィジョン(神の出現を直視する能力)によって神の姿がありありととらえられた状態が重要視されていたと考えられる。「神話はその

言語が話される場所ならどこでも関係づけられるが、ヴィジョンはいつも出現する環境として定められた場所、呼び起こされる場所が必要なのである」(4)とケレーニイは述べている。神話が地理的に一か所に限定されないのに対して、ヴィジョンが起こるためには特定の場所と結びつかなければならなかった。そして神話が明らかに特定の場所と結びついて語られる場合には、その神話がヴィジョンと密接なつながりを持つと考えることができるのである。それではヴィジョンが起こるための定められた場所とは一体どのようなところを指すのだろうか。ここで、先に挙げたクノッソス出土の印章に刻まれた女神と男のヴィジョンの場面を考えてみる。女神が立っているのは山の頂であり、背後には人工的な祭壇のようなものがある。この場所がヴィジョンを起こすための定められた聖域であると考えるのは難しいことではないだろう。ケレーニイは、クレータ島が数多くの聖域で覆われていたことについて言及している。「クレータ島の山々の尾根と頂は、エーゲ海とリビア海の間位置していることで神が出現するには理想的な場所、すなわち光の世界、ミノア期の祭祀の場所であった。同時に、地下の世界、洞窟の世界もまたミノアの祭祀の場所であった。そして、その両方の場所は大きな宮殿よりも

いっそう高い所と地中のいっそう深い所にあつたので、祭祀を行うためにはさぞふさわしい場所であつたことだろう」(5)。このように、山の頂のみならず、地下の洞窟にもミノア人にとつての聖域があり、そこで何らかの祭祀が行われていたと考えられるのである。

## 2 デイオニューソスの持つゾーエーの象徴

ケレーニイがディオニューソスとクレータ島の深い関わりを証明として提示しているのが、ミノア期の祝祭暦である。古代ギリシアにおいて、主な宗教または政治の場所では、夏至の時期に当たるシリウス星が明け方の空に昇る月を一年の最初の月にしてきた。これは何を意味するのだろうか。

ミノア期の祭祀において蜂蜜は重要な役割を持つていた。蜂蜜は神々の所有物であつたとされている。そして、蜜蜂が人間に飼育されるようになる以前には、蜂蜜が洞窟で発見されることは珍しいことではなかつた。ケレーニイは蜂蜜について次のように記述している。「蜂蜜は蜂の巣の中では発酵しない。蜂蜜が発酵するには、水と混ぜ合わされ、暑い中に晒されなければならず、これは古代においては

シリウスが明け方の空に昇る時期に行われていた。洞窟から溢れ出てくる炎の輝きは祝祭を表しているものであり、ここではまだ葡萄酒ではなく蜂蜜の飲み物であったが、酔いをもたらす飲み物が重要な役割を担っていたのである」(6)。神々の所有物である蜂蜜から作られる酔いをもたらす飲み物は聖域で行われる祭祀において不可欠な要素であったと考えられる。

酔いをもたらす飲み物が蜂蜜から作られるようになり、後に葡萄酒に取って代わられるまで、ギリシアの祭祀の間では長い間蜂蜜飲料が使われていた。ディオニューソスの祭祀が行われるようになった時期と、それ以前のミノア的な祭祀が行われていた時期とはつきり区別することはできないが、祭祀の飲み物が蜂蜜飲料から葡萄酒に移行した時期には、ディオニューソス信仰につながる何らかの手がかりがクレータ島の祭祀の中にも見受けられるようになっていたと想像できる。

宮殿と共にいくつもの葡萄酒畑が発掘されていることから分かるように、クレータ島では広大な範囲で葡萄の栽培が行われていた。葡萄酒を入れたと思われる容器も発見されているが、とりわけ牡牛の頭をかたどったリュトン(図2)は興味深い。このリュトンが、クノッソスで祭祀のた

めに建設されたとされる小宮殿跡から発掘されたことから、儀式用に使われていたと考えられることができる。牡牛と葡萄酒の関係についてケレーニイは次のように説明している。「ミノア人は葡萄酒の容器に様々な動物の頭部を使ったが、ある特定の儀式には葡萄酒を授けるための動物は牡牛でなければならなかったようである。クノッソス出土の粘土板に他の牡牛たちの名前と共に二度認められたように、ミノア人が牡牛に「葡萄酒色の」という意味の「ヘイノープス」(wino-pous)という名前を与えた際も、それはやはりふさわしいものだったのであろう」(7)。これは儀式に使われる葡萄酒を人が授けられるときに牡牛を介する必要があることを示している。そのため牡牛と葡萄酒の密接なつながりからこのような名前が付けられたとしても少しも不思議ではない。ミノア人にとって牡牛は神聖な動物であった。ケレーニイは牡牛のリュトンについて「動物や植物や葡萄酒が物質的に神と同一化して現れるのがディオニューソスの領域であり、この同一化のミノア的な表現の方法が葡萄酒の容器としての牡牛の頭なのである」(8)と解釈をしている。

ディオニューソスには、その性質と深く関わるいくつかの象徴的なモチーフがあった。それが、牡牛や葡萄酒、蛇、

木蔭といったものであった。エウリーピデースの『パッコスの信女』にはコロスの歌としてパッコスを讃える詩が記されており、蛇や木蔭も登場する。そこからはマイナデスたちが装束に結ぶ蛇とディオニューソスのつながりが明らかに見てとれる。ケレーニイは、「蛇はゾーエーが完全に縮小された最もあらゆるさま姿である」(9)と表現している。また、この一連の詩の中でディオニューソスの信仰者たちが手にしている植物は木蔭であつて、ここに葡萄の木が出てこないことから、ディオニューソスとより深く関わりのある植物は葡萄酒のもととなる葡萄ではなく木蔭であることが分かる。

### 3 ザグレウスとしてのディオニューソス

ディオニューソス信仰では、動物を素手で捕まえ、引き裂いて、その生の肉を食べたと伝えられている。エウリーピデースの『パッコスの信女』にもそのような状況が描かれている。この行動の意味するところは何だったのであろうか。ケレーニイは次のように述べている。「ギリシアでは、生きている動物を捕まえる狩人はザグレウス (Zagreus) と呼ばれる。後世のギリシアの学者たちは、この名前をへ完

全に神聖な」という意味のザテオス (Zatheos) と共通点があることからへ偉大な狩人」と解釈した。しかし、へ生きている動物を捕まえるための落とし穴」を示すザグレ (Zagre) というイオニアの言葉は、この名前がへ生」とへ生き物」を意味するゾーエー (Zoe) とゾーオン (Zoon) の語根の中に含んでいることを証明している(10)。このようにへ生きている動物を捕まえる」ザグレウスの名前がゾーエーと関係しているということは、へ生きている動物を捕まえ、引き裂いて食べる」ことが重要だったディオニューソス信仰にとつてもゾーエーが意味深いものだったはずである。この生肉を食らう行動はディオニューソスのゾーエーの神としての特徴をはっきりと示している。

一方、ディオニューソスがゼウスと冥界の女王ペルセポネーのとの間に生まれたとする神話もある(11)。ケレーニイも、「クレータ島では、ディオニューソスをへ冥界の者」を意味するへクトニオス」ともへザグレウス」とも呼ばれたゼウスとペルセポネーの息子とも見なしていた(12)と述べている。このことから考えれば、ディオニューソスは冥界ともつながりのある神ということになる。ゾーエーの神でありながら、一方ではゾーエーが全く受け入れられないはずの死の世界の神とも見なされていたということは、ミノ

ア期の人々にとってどのような意味を持っていたのだろうか。

## II デイオニューロスと渦巻文様

### 1 デイオニューロスと冥界の女王アリアドネー

ケレーニイは『迷宮の研究』で様々な神話における迷宮の意味を解析しており、ギリシア神話と迷宮の関係についても取り上げている。ギリシア神話には、牛頭の怪物ミノータウロスが閉じ込められていたクレータ島の迷宮が出てくる。この怪物を倒し、無事に迷宮から生還した若者テーセウスと、彼に糸を渡し迷宮から抜け出せるように手助けをしたクレータ島の王女アリアドネーの物語にはいくつもの異説が伝えられているが、アポロドーロスの『ギリシア神話』によれば、テーセウスを追ってクレータ島を出たアリアドネーをデイオニューロスが見つめ、自分の妻にす

るといふ結末になる。

アリアドネーについてケレーニイは次のように述べている。「彼女は有名な話のなかで、デイオニューロスにしたがう女たちがみな心のなかで獲得していたものをみずからも達成している。デイオニューロスの妻、彼の唯一の、真の同伴者という地位がそれである。デイオニューロスの妻としてあげられているのは彼女ひとりの名だけで、これがアリアドネーである。彼女についての話で有名になった形のものによれば、彼女はミノース王と太陽の娘パルシパエーのあいだの娘であった。つまりこれは、女神の名前をもった人間の娘であった。もともとアリアドネーはアリアドネーで、その意味は「ハグネー（ハグネー）ハグネー（ハグネー）ハグネー（ハグネー）」（13）。ギリシア神話において冥界を司る女神はペルセポネーである。しかし、アリアドネーがペルセポネーと同じ異名を持っていた可能性を示す例をケレーニイは見いだしていたのである。

アリアドネーはただ迷宮でテーセウスを助けた乙女というだけではなく、デイオニューロスの妻という立場にあり、また冥界の女神としての性格も持ち合わせていたと考えら

れるのである。ケレーニイは迷宮を「冥界の最古の形」と定義している。クレータ島で考えられていた迷宮は、人を迷わせるためのものではなく、中心で方向転換し、来た道を戻れば再び出ることが出来るものだった。入ってそこから二度と出てくることのできない迷宮は、冥界すなわち死の場所を表していたが、そこから出てくることは再び生を得ることであった。つまり、この神話の中で語られるテーセウスが迷宮に入り再び出てくるという行動は死と再生を意味しており、彼に糸を渡して脱出の手助けをしたアリアドネーは死と再生を司る冥界の女王でもあったのである。「神話の中では偉大な女神は王女になっていたが、彼女らの同一性に疑いはない」(14)とケレーニイは述べている。

## 2 迷宮と舞踏

ケレーニイは、「ギリシアの迷宮は、1、神話的建築物として記述され、2、舞踏化され、3、螺旋によって輪郭表示もしくは図示される」(15)と述べている。彼は迷宮を考える際に切り離せないものとして舞踏を挙げている。渦巻文様だけであれば、ミノア期より更に古い時代の遺跡や遺物にも見ることが出来る。舞踏自体は形の残らないも

のであるから、舞踏についての記述が残っていないからといって舞踏の存在を否定することはできない。しかし、明らかに迷宮との関連性、そして、ディオニューソス信仰とのつながりを持つ可能性のある渦巻文様が見られるようになるのはミノア期以降のクレータ島である。ギリシアでは、ホメロスによって初めて迷宮がもとになっている舞踏について記述された。「イーリアス」(第18歌 590行)ではダイダロスがアリアドネーのために作った舞踏場について述べられているが、ギリシア神話でミノータウロスを閉じ込めるための迷宮を設計したのもダイダロスであった。ホメロスによって舞踏と迷宮が結び付けられることはなかったが、舞踏も迷宮も同じ神話上の人物と関係づけられて語られてきたことは、両者の関連を示す証拠である。アリアドネーの舞踏場で踊られた舞踏は、テーセウスが神話のなかで演じた迷宮への入場と脱出、つまり死と再生を表したものであり、アリアドネーのための舞踏場とは、迷宮のことなのである。

## 3 渦巻文様の意味するもの

迷宮を表す図形としては、迷宮の構図を描いたクノッシ

オン(図3)と呼ばれるものや、迷宮の持つ意味だけを残り簡略化され、四角い線で細長く続けて描かれる電紋文様、渦巻を続けて描く渦巻文様などのメアングラーと呼ばれる文様がある(図4・5)(16)。電紋文様と渦巻文様は、形は違いますがその意味するところは同じである。この二つの文様が併用して使われた例としてアテーナイのアクロポリスから出土した酒器(図6)がある。ケレーニイは『迷宮の研究』で以下のように述べている。「果てしない螺旋は、ひとつの観念の<sup>ヴァリエーション</sup>変奏であり、それ自体がさらにそれなりに変奏された変奏である。そのいくつの変奏のひとつが渦巻文様であり、他のひとつが電紋文様であった。後者は円形より角のあるものが好まれたために、渦巻文様から派生したが、概してこれは生の様式の深層にまで及ぶ変化を意味した。古典ギリシア文化にとっては角張った雷紋文様形式によつてディオニューソス迷宮の輪郭を描くことは、ある偉大な考古学者がこれをへ形象的伝統の強靱さの驚くべき一例」としたほど、すでにかなり古風であった。しかしアツテイカの壺絵描きも雷紋文様と渦巻文様とをなお同一の主題の二つの変奏のように並列的に使用している。彼らはこの両者によつて同時に(ヘラビュリントス)としてのミーノータウロスの塔状の家を特徴づけているのだ。この例は、

雷紋文様の起源と意味をどのように解すべきかという問題にとつて決定的である。すなわち、螺旋の根底にあつて螺旋において実現されていた概念が、あるとき電紋文様へと考えを改められ、(考えが変わつたのは線においてであつて、概念においてではなかつた!)、かくして後者が派生してきたのである」(17)。また、彼は迷宮と文様について次のようにも述べている。「迷宮は、それが蒼古たる宗教的慣習かも知しくはすくなくとも始源的芸術行為の記念物としてあらわれた場合は、そこに多少とも、しばしばきわめて単純なものであるにもせよ、螺旋の形態が認められる」(18)。以上のように、彼の主張によれば迷宮に基づく図形は最初は螺旋の形態をしていたことになる。確かに、ミノア期の美術品には渦巻文様を施したものが圧倒的に多い。しかし、ここで見られる渦巻文様のすべてを直接的に迷宮のイメージに結びつけることは困難である。フェイストスの旧宮殿から出土したカマレス式の壺や皿(図7・8)には、はっきりと渦巻文様が描かれていたが、迷宮やディオニューソス信仰と結びつくような手がかりは見つからない。これらは波や植物などをモチーフとした単なる装飾としての文様と考えられる。

しかし、渦巻文様が神殿建築や祭祀の道具、棺などに見



られるようになると、文様の描かれる場所が宗教や死に関わりがあることから、これらのものを渦巻文様と迷宮を結びつける証拠と考えることができる。マリアの旧宮殿から出土した紀元前一六〇〇年頃の豹をかたどった斧(図9)には一面に渦巻文様の裝飾が施されているが、その精密な細工から供儀や祭祀のためのものだったと思われる。ザクロスから出土した紀元前一五〇〇年頃の容器(図10)には山の聖域が刻まれており、その入口は渦巻文様で表されている。また、紀元前一五五〇年頃のものといわれるミラベル口湾のプセイラ島から出土した祭祀用の壺(図11)には牡牛の頭部、木蔦の葉、渦巻文様が同時に裝飾として使われている。これはミノア期のクレータ島でディオニューソスが信仰されていた可能性を示す重要な証拠である。

ハギア・トリアダから出土した紀元前一四〇〇年頃の彩色石棺には供儀の牡牛が描かれ(図12)、同じ頃のパライカストロ出土の石棺(図13)にも神聖な角と翼を持ったグリフィンが描かれ、どちらの場合にも両脇に渦巻文様の裝飾がなされていた。墓の形式や裝飾は死の觀念に強く支配されているはずである。このことから、ミノア期の人々にとって墓は渦巻文様が示す死と再生の場所だったと考えられる。おそらく彼らにとつての死とは、途切れることのない

渦巻文様が示している、永遠に続くゾーエーの上の通過点のようなものであったのだろう。クノッソス宮殿の壁からも渦巻文様の裝飾(図14)が発見されており、ケレーニイはこれについて「ミノア期の壁面に変々よく見られた渦巻文様の裝飾は、他のほとんどのクレータ島の芸術と同様に、何ものにも中断されずあらゆるものに浸透していたゾーエーと明確に関係づけて説明できるだろう」(19)と述べている。渦巻文様と雷紋文様が同じ意味を持つことは先にも述べた通りであるが、渦巻文様が形式化された雷紋文様が広く使われるようになるには、しばらく時間がかかったようである。

ケレーニイによれば、「雷紋文様は紀元前二世紀か三世紀には図形も言葉も関連を持ち存在していた」(20)という。この証明としてデイデュマのアポロン神殿(図15)が挙げられている。この神殿の屋上に通じる階段の天井には雷紋文様の裝飾が施されていた。この階段が光に満ちた屋上への曲がりくねった道であったことから、天井の文様が迷宮を暗示していたことは確実であると彼は述べている。なぜなら迷宮は冥界の象徴ではあったが、方向転換し外へ向かうことで、再び光の世界へ生まれることを意味していたからである。

クノツソス宮殿の地下の廊下からアーサー・エヴァンズ卿によって発見され、復元された迷宮のフレスコ画(図16・17)の意味を、ケレーニイはディデュマのアポロン神殿の雷紋文様と結びつけて解釈した。アポロン神殿の雷紋文様が光の屋上に続いていたことと同様に、クノツソス宮殿のフレスコ画の廊下も光の庭へ続いていた。彼は次のように述べている。「クノツソス宮殿の廊下は最も重要な宮殿の光の源、つまり七本の円柱に囲まれた中庭へ通じていたのである。このことは、我々に *da p'ne hol'o* (21) がミノア人にとって何を意味していたのかを教えてくれる。それは「光への道」だったのである」(22)。このように、ケレーニイはディデュマのアポロン神殿とクノツソスの宮殿のどちらもが光に通じる廊下を持った構造で、そこには迷宮を意味する雷紋文様やフレスコ画が描かれていたことから、迷宮が暗い冥界ではなく、光に満ちた再生への道として考えられていたことを証明したのである。迷宮が光の世界へ通じていたことが示すように、ミノア人にとっての死は再生につながってゆくものだったと考えることができるのである。

## 結

以上のように、ケレーニイが『ディオニューロス』と『迷宮の研究』で示した見解に基づき、ミノア芸術に見られる渦巻文様の意味を考えてきた。ミノア期のクレータ島でディオニューロスが信仰されていたのか、ミノア期の渦巻文様とディオニューロスにつながりはあるのか、という疑問を解明するには断片的な手がかりしかないが、それらの共通点をつなぎ合わせることで解明に近づくことはできるはずである。ケレーニイはディオニューロスをクレータ島の神と考え、牡牛、葡萄酒、蛇、木鳥、アリアドネーなどの、この神と関わりのある要素をクレータ島と結びつけることで、後にギリシアへ広がったディオニューロス信仰の起源がクレータ島にあることを提示した。また、あらゆる文明に見られる宗教的な渦巻文様は冥界としての迷宮を暗示した図形であるとの見解に基づき、ミノア芸術に見られる渦巻文様と、後にギリシア神話で語られることになる迷宮の物語との関連を示した。神話は核となる何らかの出来事に、伝承される過程でいろいろな要素が加わってゆくものである。ギリシア神話で語り継がれたクレータ島の迷宮の物語

にも、もともになるモチーフがあつたはずなのである。それが、ミノア芸術に数多く残されていた迷宮を意味する渦巻文様であり、その根底に流れるゾーエーへの憧れだつたのではないだろうか。

ミノア芸術にディオニューソスの姿が描かれることはなかったが、クレータ島のディオニューソス信仰は、様々な伝承や名前の関連、そして祭祀における酔いをもたらす飲み物や牡牛の果たした役割などを考えることで、その存在の可能性が明らかにされる。特にミノア期の美術品に他のどの動物でもなく、ディオニューソスの化身ともされる牡牛をかたどつたものが多く見られることは興味深い点である。また、プセイラ島から出土した祭祀の壺にはディオニューソス信仰の要素である牡牛、木蔦、そして渦巻文様が一度に描かれていたが、これによつてこの祭祀ではディオニューソスとミノア人が木蔦で表現したゾーエー、迷宮における死と再生が関係づけられていたことが示されているのである。そして、棺に描かれていた渦巻文様は冥界を死と再生の場と考えた彼らの死生観を表しているといえる。ディオニューソスはゾーエーの神である一方で、ヘゼウスの冥界の息子<sup>レ</sup>という死の世界の顔も持っていた。また、アリアドネーも迷宮の女主人としてペルセポネーと同一視さ

れるという冥界の顔を持つ一方で、ディオニューソスの妻としてゾーエーに魂を吹き込む、母として命を授ける役割を担っていた。この二人がそれぞれに生と死の両面を持っていたことは、冥界である迷宮の中に死者を招き入れ、ゾーエーに魂を吹き込み再び迷宮の外へ送り出すという、死と再生を司る神と考えられていたことを示している。渦巻文様は棺の装飾として描かれていたが、同時に聖域や宮殿、祭祀の道具などからも見つかつた。このことが示すのは墓が暗く忌むべき場所ではなく、ゾーエーを与えられる場所であり、聖域や祭祀の場所と同じ象徴を持っていたという事実である。ミノア人にとつてディオニューソス信仰はゾーエーを与えてくれる神への崇拜であつた。そしてディオニューソスは、彼らにとつての冥界の女神であり母でもあるアリアドネーさえも自らの領域に納めている偉大な神だつたのである。

## 注

略号  $\rho$  はページ、 $\Gamma$  は行を表す。本文中では、混乱を避けるために引用のギリシア語表記を統一した。

(一) C.Kerenyi, *Dionysos*, Translated from the German

- by Ralph Manheim, Printed in Princeton University Press, 1976, Introduction, p. xxxiii 1.25-p. xxxiv 1.1.
- (2) Kerényi, *op. cit.*, Introduction, p. xxxiv 1.13-14.
- (3) Kerényi, *op. cit.*, Introduction, p. xxxv 1.9-11.
- (4) Kerényi, *op. cit.*, p. 16, 1.3-5.
- (5) Kerényi, *op. cit.*, p. 16, 1.27-p. 17, 1.5.
- (9) Kerényi, *op. cit.*, p. 34, 1.23-p. 35, 1.2.
- (7) Kerényi, *op. cit.*, p. 54, 1.4-8.
- (8) Kerényi, *op. cit.*, p. 55, 1.11-14.
- (6) Kerényi, *op. cit.*, p. 114, 1.21.
- (10) Kerényi, *op. cit.*, p. 82, 1.3-7.
- (11) 高津春繁著『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九六〇、二二九頁のザグレイウスの項によれば、「オルペウス教でディオニューソスと同一視されている神。ゼウスは蛇の姿でペルセポネーと交わり、第一のディオニューソスが生れた」とある。
- (12) Kerényi, *Dionysos*, p. 83, 1.18-20.
- (13) カール・ケレーニイ著、高橋英夫訳『ギリシアの神話神々の時代』、中央公論社、一九七四、p. 290, 1.19-p. 291, 1.6.
- (14) Kerényi, *Dionysos*, p. 99, 1.5-6.
- (15) カール・ケレーニイ著、種村季弘・藤川芳朗訳「迷宮

の研究」〔『迷宮と神話』、弘文社、一九七三に収録〕、p. 24, 1.3-4.

- (16) メアンダーとは、小アジアのカリア（現在のトルコ）を曲折蛇行して流れるマイアンドロス川の名前に由来する。渦巻文様より雷紋文様としての意味が強い。
- (17) ケレーニイ「迷宮の研究」、p. 84, 1.3-14.
- 混乱を避けるために、引用文の曲折模様を雷紋文様に、螺旋曲折模様を渦巻文様に言い換えてある。
- (18) ケレーニイ「迷宮の研究」、p. 11, 1.2-4.
- (19) Kerényi, *Dionysos*, p. 95, 1.6-8.
- (20) Kerényi, *op. cit.*, p. 90, 1.13-15.
- (21) クノックス出土の粘土板に記されていた文字で、ギリシア語に当てはめると、*Kabupubouo* となり、「ラビュリントス（迷宮）」を意味する。
- (22) Kerényi, *Dionysos*, p. 95, 1.19-22.

### 図版出典一覧

- 図1 クノックス出土の印章（復元図）、B.C.1550-1400 (C. Kerényi, *Dionysos*, p. 391, 4c)
- 図2 牡牛の頭部をかたどったリュトン、B.C.1550-1500 (ク

- ノックスの祭祀用と思われる小宮殿跡から出土) (Marinatos, *Crete and Mycenaee*, No.98)
- 図9 ユネロス出土の粘土板に刻まれたクノッシオン (B.C. 1300 (ネストール遺跡から出土) Kerényi, *Dionysos*, p.408 45)
- 図4 四角いメアンター (雷紋文様) (ケレーニイ、『迷宮と神話』p.25345)
- 図5 螺旋のメアンター (渦巻文様) (ケレーニイ、『迷宮と神話』p.25345)
- 図6 アテーナイのアクロポリスから出土した酒器 (B.C. 700-600 (Kerényi, *Dionysos*, p.40445))
- 図7 カマニス式壺 (B.C.1850-1700 (Marinatos, *Crete and Mycenaee*, No.VIII))
- 図8 カマニス式壺 (B.C.1850-1700 (Marinatos, *Crete and Mycenaee*, No.XIII))
- 図9 トリア出土の豹をかたどった渦巻文様の壺 (B.C. 1550-1600 (Marinatos, *Kreta, Thera and das Mykenische Hellas*, No.68))
- 図10 ザンロス出土の山の聖域を刻んだ壺 (B.C.1500 (Marinatos, *op. cit.*, No.109))
- 図11 トヤーン島出土の祭祀用の壺 (B.C.1550 (Marinatos, *op. cit.*, No.81))
- 図12 ハギン・トリンタ出土の彩色石棺 (B.C.1400 (Marinatos, *op. cit.*, No.101))
- 図13 ハナイカステロ出土の石棺 (B.C.1400 (Marinatos, *op. cit.*, No.131))
- 図14 クノッソス宮殿、双斧の間の壁面装飾 (B.C.1700-1450 (Marinatos, *op. cit.*, No.39))
- 図15 ハイネットのマゼロン神殿のメアンター (B.C.300-100 (Kerényi, *Dionysos*, p.40545))
- 図16 クノッソス宮殿地下から発見されたフレスコ画 (復元) (B.C.1700-1450 (Kerényi, *Dionysos*, p.40845))
- 図17 米国のなかの壺 (*ibid.*)

#### 主要参考文献

- C.Kerényi, *Dionysos*, Translated from the German by Ralph Manheim, Printed in Princeton University Press, 1976.
- Crete and Mycenaee*, with Text and Notes by Spyridon Marinatos, Photographs by Max Hirner, Translated from the Greek by John Boardman, Thames and Hud-

son, London, 1960.

S. Marinatos, *Kreta, Thera und Das Mykenische Hellas*, München, 1973.

カール・ケレーニイ著、岡田素之訳『ディオニューソス』、白水社、一九九三。

カール・ケレーニイ著、種村季弘・藤川芳朗訳「迷宮の研究」(『迷宮と神話』、弘文社、一九七三に収録)。

カール・ケレーニイ著、高橋英夫訳『ギリシアの神話 神々の時代』、中央公論社、一九七四。

高津春繁著『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九六〇。

## 付記

小論は卒業論文として提出したものを書き改めたものである。

卒業論文及び本稿執筆にあたり、北嶋美雪教授には懇切なご指導を頂きました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、お世話になった方々にも深く感謝いたします。



図1 クノッス出土の印章

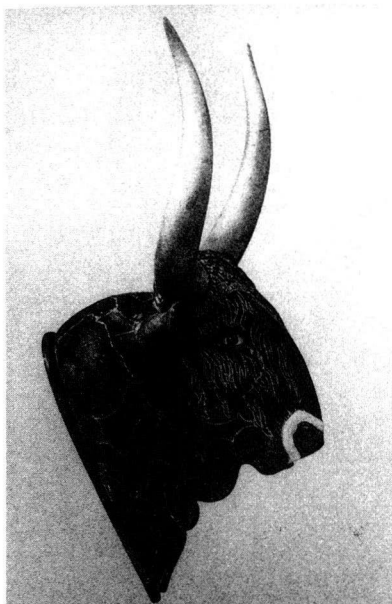


図2 牡牛の頭部をかたどったリュトン

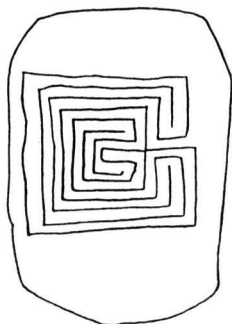


図3 ピュロス出土の粘土版に刻まれたクノッシオン

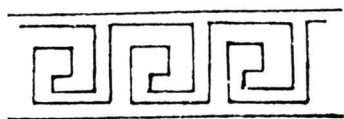


図4 四角いメアンダー



図5 螺旋のメアンダー



図6 アテーナイのアクロポリスから出土した酒器



図7 カマレス式壺



図8 カマレス式皿

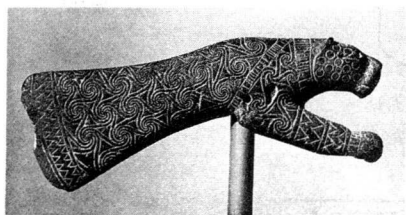


図9 マリア出土の豹をかたどった渦巻文様の斧



図10 ザクロス出土の山の聖域を刻んだ容器



図11 プセイラ島出土の祭祀用の壺



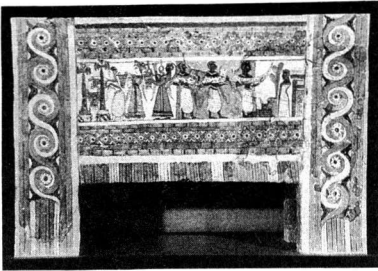


図12 ハギア・トリアダ出土の彩色石棺



図13 パライカストロ出土の石棺

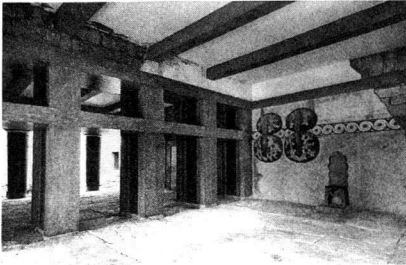


図14 クソツソス宮殿双斧の間の壁面装飾

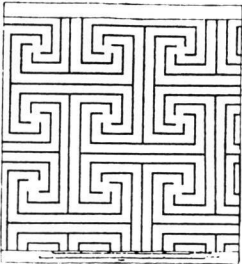


図16 クソツソス宮殿地下から  
発見されたフレスコ画

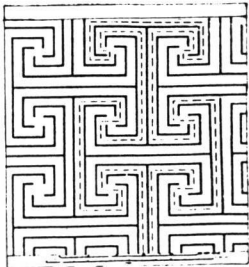


図17 迷宮のなかの道

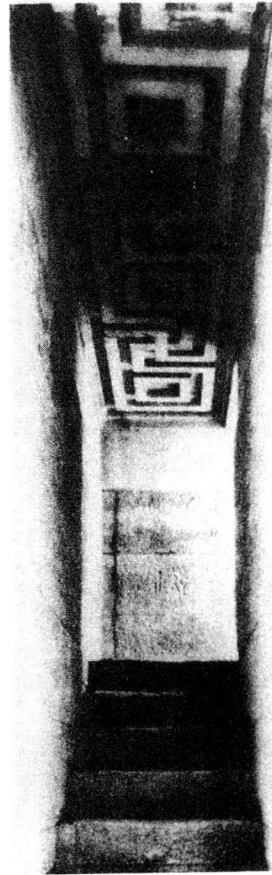


図15  
ディデユマのアポロン神殿のメアンダー